

若越郷土研究

11の6

大名政府

W・E・グリフィス
杉原文夫 訳

訳者まえがき

本稿は本誌九卷一号（昭和三九年一月）に「グリフィスの遺稿」として紹介した彼の三編の未刊行原稿の一つの全訳である。内容については、新しい事実はあまり見出し得ないが、明治四年の藩政末期の福井が外国人の眼にどのように映じたかを知る貴重な資料となる。

外人の眼ということを意識してもらおうため、西洋的表現はわざと直訳し、意識はしないことにした。たとえば「法廷」と直訳し、「白州」と意識してない。同じ理由で彼が日本語をそのままローマ文字化して用い

杉原 大名政府

ているものは、訳文では片かなで記しておいた。だから「藩」と訳したものは英語で *han* とあり、「ハシ」と訳したものはローマ字で *han* とあることを示す。ただ地名人名等でありふれたもの、たとえば江戸・福井・家康・忠直などは漢字になおしてある。グリフィスの記述には多少の誤りや不正確なところがあるが、訂正せずにそのまま訳し、必要あるときは註を付けた。「」内の註は訳者の註、「（）」内の註は原著者の註である。グリフィスの原稿は消して書きなおした所が多いが、特に必要がない限り、そのことについては註記せず、添削された新しい方の文章を訳してある。

グリフィスの原稿は右肩に二五三から一七八までの番号が付いている。途中で一六〇から一七〇に番号がとんでいる。しかし文章は続いているようであるから、脱落ではないであろう。また一七〇の下半分と一七一の上部が切つてある。これも文意は続いている。原稿の左肩に一から一六までの番号が付いている。これは右肩番号一五八のシートだけ番号を付け落している。従つて実際はみなで一七枚ある。

原稿はグリフィスによって清書されたら

みえて、美しい字で読みやすく書かれています。しかし、それを推敲して行間に加筆した部分は、字が小さい上に乱筆で、はなはだ読みにくい。行間の書きこみの更に行間に書いた部分などは、虫めがねでのぞいても判読困難であるが、幸にしてどうやら読解できた。

東京大学史料編さん所の金井圓氏も本稿の訳文を本誌に寄せられたが、私の訳文のあることを知り、快く発表を私にゆずって下さった上、氏の訳文をも自由に参照してよい旨のことばをいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

あるダイミョウの政府

わたしがそこで過す運命となつた越前は、ホンド「本土」の西岸近江と加賀の間にある美しく豊かな州である。古くは、首府の北方海と山との間にあるこの地方を、通過あるいは越えるという意味の原語で *コシ* と称した。ミカドの支配が広がるにつれ、*コシ* は三つのエチに区分された。エチゼン、エッチュイ（原文のまま）、エチゴ、すなわち *コシ* の前、*コシ* の中、*コシ* の後である。エチは *コシ* と同義の漢語である。

越前は十二世紀から十七世紀まで戦場であつた。この地で信長の父が生れ、秀吉と家康が戦い、朝倉、柴田、新田が死んだ。ここで有名な僧泰澄と道元が最初の日の光を見「生れ」、ここで偉大な宗派が創立され、ゼンの最初の寺院が建てられた。この地には、反対宗派と血みどろの戦闘をたたかい、ついで信長に敵対して軍隊を送つた最大の僧院の二つが建っている。歴史的関連の最終かつ最大のものとして、越前は一天の子「ケイタイ・テンノウ、西暦五〇七から五二一まで統治した第二十六代のミカドを産んでいる。

家康は越前をその長男秀康に七〇万コクの歳入をもつて与えた。当時首都はキタノシヨウ(北の邸宅)という不吉な意味のことばで呼ばれていた。なぜならば、北は平時には邪悪な影響が、戦時には敗北が起りやすい方向である。城の中に清く甘い水のわく深い井戸を発見し、それを吉兆として受取つたので、彼はこの市をフクイ(吉兆の井戸、幸福な井戸、祝福の井戸)と命名した。それから城は大々的に拡張され強化されて、国内で最強の城の一つと考えられていた。

彼のむすこ忠直は、若いころ勇敢な戦士であつて、家康が一六一五「元和元年」オザカ「大阪」城を包囲攻撃したとき、城壁をよじ登つて一番乗りをした人であつた。彼は自らの手で多数の敵を殺した。しかし彼は晩年ひどく邪悪になり、人民をすこぶる残忍に取扱つた。この州の一般的な案内書でありかつ地名辞典であるエチゼン・メイセキコー「越前国名蹟考」という十二巻の書には、越前家に不利なことは何ごとも発表が許されていなかった。しかし民衆は彼の残忍さについて多くの伝説を保持していた。わたしは伝説から彼の残忍さについて知つたのである。

彼について次のように伝えられている。忠直はあるとき狩りに出て空中高くある美しい女の幻影を見た。彼女は忠直を非常に魅惑したので、彼は使者を越前のすべての部分に派遣して、幻影の本人を探させた。人相書そっくりの無比の魅力をもつ女が田野を歩いているのが発見され、公のもとに連れてこられ、彼の妾にされた。彼女は人間の女性の形をした悪魔であることが後でわかつた。彼女は自分の主人にたくさんの邪悪な行為をするように吹きこんだ。彼は

自分の刀で罪人やけものをバラバラに切り刻むことに異常な情熱をもつた。彼の最高の喜びは妊娠した女を切裂いて胎児の細部を明らかにすることであつた。このことやその他のすべての悪事において彼の妾イツパクが彼をそそのかしたのである。当時越前の無学な農夫は、オザカで殺されて死んだ戦士たちの霊が、この女イツパクの中にはいり、彼女を送つて越前家「忠直を消して越前家としてある。」を誘惑し、あざむき、呪わさせることによつて、自分たちのために復讐したと信じていた。

福井城の昔むして草茂げるある部分「おすみやぐらの部分」はいつも閉ざされているが、そこはイツパクの亡霊がかくれている場所であるとわたしは指さし教えられた。ここへは誰もあえてはいろいろとしなかつた。民衆のいうところによると、数年前「わたしが到着する前とあつて消してある。」公は強く勇しい男を送つてこの薄暗い隅を夜間見張らせた。長く待った後、彼は真夜中に美しい女が塔から現われ、湿つて草の茂っている防壁の上をじしじすと歩むのを見た。彼のそばを通るとき、彼女は自分がイツパクの魂であるといい、もし彼が彼女

杉原 大名政府

越前家の十七人の君公が一六〇一〔慶長六年〕から一八七二〔明治五年〕まで福井で統治した。この家系の十四代目〔正しくは十六代目〕でかつわたしの日本在住の全期間を通じてわたしの特別の友人であった人〔慶永〕は、一八六〇〔一八五八の誤り〕江戸で撰政〔大老〕井伊によって不興を蒙った人であり、復職して最高長官〔政事総裁職〕になったとき、ダイミョウウの家族を人質として江戸に置く習慣を廃止し、ガマリエル流の議論でキリスト教の許容を弁護し

を見たことを誰かに話すならば、ただちに死ぬであろうといった。そのとき彼は、彼女の背中がゾットするような、ネバネバした怪物の背中であることを公に話した。数週間後彼は死んだ。一般の民衆と子供は、彼の死はかの霊によるもので、彼が霊の警告を無視したからであると信じていた。

忠直の失政、暴虐および悪行に対し、シウグンは越前家の最初の子孫を罰して、その歳入を半分以上へらし、三十二万五千コクだけとし、州の他の部分を従属するダイミョウウに割当てた。

たパンフレットを書き、王政復古に導く諸事件にきわだつて異彩を放ち、しばらくの間東京において大学の首席評議員〔大学別当〕であり教育長官〔待講〕であった人である。彼は外国思想の導入における指導者のひとりであり、またミカドの個人的な恩顧を受けたことがある。一八七〇〔明治三年〕わたしが彼にあったとき、彼はインキ

たしが最初に到着したとき面接した現職のダイミョウウ〔茂昭〕は、福井における封建的統治者の家系の第十七代でしかも最後の人であった。彼はもとフダイ〔譜代〕として越後の糸魚川の小さな領土を一万コクの歳入をもって与えられていたのであるが、一八六五〔慶応元年〕そのおじを相続した。

地域の貴族名鑑〔武鑑のことか。〕においては、越前分家松平、すなわち徳川家族といわれている越前家、を創始した家康の長男〔秀康〕の子孫は一八六一〔文久二年〕現在で次のとおりである。

名と称号	ダイミョウウとしての地位	領国	都市	コクで表わした収入
マツダノカミ	カモン	ミサカ	ツヤマ	一〇〇、〇〇〇
マツダノカミ	コクシ	エチゼン	フクイ	三三〇、〇〇〇
シヨウダノスイケ	カモン	エチゴ	イトイガワ	一〇、〇〇〇
デマツノカミ	カモン	イヅモ	マツエ	一八六、〇〇〇
サマツノカミ	カモン	イヅモ	ヒロセ	三〇、〇〇〇

杉原 大名政府

マツダイラ エツチユウノシン	カモン	イツモ	モ	一〇、〇〇〇
ヤマツダイラ カミ	カモン	ムサシ	カワゴエ	一七〇、〇〇〇
マツダイラ ヒョウブノタイユ	カモン	ハリマ	アカシ	一〇〇、〇〇〇

一八七二〔明治五年〕以前に越前国で保有されていた封土は次のとおりである。

ダイミョウの名と称号	地位	都市	収入
マツダイラ エチゼンノカミ	コクシ	フクイ	三三〇、〇〇〇コク
マナベ シモサノカミ <small>〔原文のまま〕</small>	フダイ	サバエ	五〇、〇〇〇
アリマ ヒユウガノカミ	フダイ	マルオカ	五〇、〇〇〇
ドイ ノトノカミ	フダイ	オーノ	四〇、〇〇〇
オガサワラ サエモンノスケ	フダイ	カツヤマ	二二、七七七
サカイ ウキョウノスケ	フダイ	ツルガ	一〇、〇〇〇

越前にはそのほかシヨウゲン政府に属し、ブニョウ(知事)〔奉行〕の管理下に
あるホンボ「本保」という小さい村があ
る。数人のハタモトもまた五百コク以上
の収獲をもたらす土地を保有してこの
国に住んでいた。越前とその各部分の
封土地図

は、他の国についてもわかりやすい観念を
与える。すべての国は、多かれ少かれ、こ
のように分割されていた。越前全国には、
端数をまるめて、九万七千の家、ほぼ五十
万の人、千五百の仏教寺院、三百五十のシ
ントウの社があった。両性の数はほとんど

同じであり、公式文書では、その差はわず
か八人で、女性の方が多い。

日本の大都市のほとんどすべてが、城を
もつダイミョウの首都であり、同じモデル
によって設計されている。村における庶民
の唯一の階級はハヤクシヨウ〔原文のまま〕
すなわち農民であり、町にはチヨウニンす
なわち町人、商工階級から構成され、僧侶
と通常はきわめて少数のサムライを含む市
民、が住んでいる。ダイミョウの首都、す
なわち城のある都市には、その藩のサムラ
イのほとんどすべてが住んでいた。市民が
いくつかの明確に特徴付けられた社会層ま
たは階級に分かれていたごとく、都市自体
も同様に各階級を区分するように設計され
ていた。かくて、ダイミョウ、その閣員と
家来、サムライ階級のすべて、は都市の大
きい部分、主として城の周囲を占拠してい
た。チヨウニンすなわち町人は別の大きな
区画を、僧侶と寺院は他の区画を、農民は
市の一部と思われるほど市の近くにある郊
外の村を、それぞれ占拠していた。福井で
は川に面した通りにエタと呼ばれる軽蔑さ
れた賤民が住んでいた。彼らは皮をつくり
加工していた。こじきは全部で百人ほど

るが、橋の下の河原で寝ていた。

福井藩のサムライは、朝倉、柴田、新田に従った中世の古い戦士の子孫、または秀康の家来であった。彼らの数は一八七一

〔明治四年〕において約三千家族であった。少数の者の収入は千から三千コクの間であり、多数の者が千と百の間であった。しかし大部分は百から二十を受取り、さらに二十コクから五コクへと収入は薄くなっていた。これではかろうじて生計をたてているというみずばらしい誇りと困窮した体面を助けるだけの薄給である。一八六八〔明治元年〕の戦争中に兵士を召集するため庶民の数を調べたとき、七千の戦士が、福井藩の最大限の割り当てとして計上された。

少数のサムライの家族、二十または四十家族、は城郭外の市の適当な部分に住んでいた。しかし固有のサムライ区画は城の中にあつた。この主要な境界線を理解することによって、ひとは福井でたやすく道を見付けることができる。ここでは住居はヤシキすなわちかやまたは瓦ぶきの家の列である。それは壁によって、たいていは竹のきれいな垣またはひばの生け垣によって、広い街路から区切られた庭をもっており、静

杉原 大名政府

かではあるが、市のひじようにきれいで美しい部分であった。街路はまっすぐであつて、通常は羅針盤の相対する其本方位〔東西および南北のこと〕に走っていた。各街路の一方の側に、家の前を、純粋で澄んだ山水が三ないし六フィートはばで石の岸の間を流れていた。この区画〔サムライ区画〕では威厳のあるサムライ、身なりのよい若い婦人、または美しい子供とその下女のほかは、まれにしか人にあわなかつた。夏の夕方にはそれは生命と色彩と人間の幸福の場であつた。それをわたしは十分楽しんだ。

わたしはいつもこの部分を通つて夏の夕方わたしの対していつも近付きやすく、かつ開かれていた。わたしは選ばれた二三の家に儀礼ばらばらにいらることができた。そこでは客あしらいのよい歓迎を受けることは確かであつた。これらのうちの主なものは、ダイサンジ〔大参事〕、村田、三岡、小笠原、千本、わたしの管理人佐々木、わたしの護衛井上と三好、その他多くの人の住居であつた。主要な商店街をゴフクチウ〔呉服町〕といつた。〔以下十数行切断されてゐる。〕

市の主要部分は川の北側に位置していた。南岸には、通常の商店、住居、寺院、果樹園、庭園のほかに、劇場、役者や歌姫の家、米倉、陶器製造所、石切場、牢屋、墓地、火葬場、そしてアタゴヤマ〔足羽山のこと〕があつた。この岡または山の一方の側にダイミウの墓地があり、岡の頂上には王政復古の戦いで殺された英雄が眠っている墓地、シウウコンシャ〔魂を招く安息所〕〔招魂社〕と呼ばれるうつくしい場所、があつた。他の側には有名な泉または井戸〔湯屋清水のこと〕、弓道の通廊〔矢場〕奥まったピクニック場所があり、石段に沿つては宴会場をもついくつもの陽気な茶屋があり、そこでは酒宴のとき福井にいる二百人以上の歌姫の中のもっとも美しい者が給仕し、歌い、そして踊つた。たいていのダイミウの首都になかつたのと同じように、福井には売春宿はなかつた。しかし十二マイル離れた所にある三国港はかんばしくない評判をもつていて、サムライはハンチウ〔藩庁〕に事実を届出なければ、三國へ行くことができなかった。

公共の建物については、堂々と自負するようなものはなく、すべて、風雨にうたれ

た木できており、かわら、こば板またはかやぶきの屋根の、同じように単調な低い建物であった。アタゴヤマから見る市の展望は、屋根の巨大な集りを見せるだけで、ただ城の塔、巨大な寺院の破風、火の見やぐら、時計台〔時鐘のことか〕、高い木、竹やぶによって単調さが救われていた。君公の住宅も外観では他のものと区別できず、ただその場所が第二城郭〔二の丸〕内にあることよって区別された。彼の世帯は、かつては王者らしい規模で組織されていた。六十人以上の従者が、家令、小姓、使者、下男、馬丁として彼の家族につながっていた。このほか同じ数ほどの女が、彼の妻を含め、妾、侍女、乳母、下女、その他としていた。この数は今では大いにへらされた。

ダイミョウの次にはダイサンジ〔大参事〕すなわち偉大な人、時にはカロウ〔家老〕と呼ばれる人がくる。彼らは大名の閣員で、サムライに対しダイミョウの法令につき責任をもつ。カロウは特別の名譽がささげられている十家族からのみ選ばれる。彼らは藩の実権を保持していた。福井には三人いたが、より大きい藩にはそれより多く

いた。すべての最高重要事項は彼らによって討議され、決定され、是認または否認された。外人教師をやとう考えは彼らからおこり、わたしの契約はこれらの人となされた。(註二) 次の地位に五人のゴンダイサンジ〔権大参事〕すなわち補佐役がくる。彼らは権力の大きな分け前をもっていた。その次にショウサンジ〔小補佐役〕およびゴンシヨウサンジ〔副小補佐役〕があった。それから二十ばかりのだんだん下降していく等級があり、数百人の役人がいた。これらはみなヤクニンすなわち政府の役人自体であって、権威の山の頂上および曲線を形づくっていた。この山はサムライ階級の台地からそびえており、その台地はさらに、政治的にはゼロにひとしい庶民の平原の上ののっていた。ダイミョウからダイサン

ジ、さらに次々と続いている等級によってより下級なサムライに至り、それから僧侶、農民、すべてのものの最下級である職人と商人に至るまで、中斷のない権威の下降があった。それは一見した所では、段階よりもむしろ曲線になつてつながらつていようであったが、より近くでの観察はわたしに、その段階が鋭い直角であることを教

えた。

藩の政務が執行される家はハンチョウ〔藩庁〕と呼ばれた。数千平方フィートにわたる広大な建物は、その中でダイサンジが一方の端に坐り、いろいろな部局の役人が他の端および他のへやに座席をもった。外側には馬小屋や、請願人、納税者、許可を待つ人の休息所があった。藩の部局すなわち役所は次のとおりである。(註三)

会計局〔会計寮〕

裁判所〔聴訟〕

監察局〔監正寮〕

戸籍局〔戸籍〕

軍務局〔軍務寮〕

造幣・通貨局〔総会所〕

公共事業局〔民政寮〕

ハン中における両刀をさした紳士の数は約三千人であった。(註三) 理論上はある等級のサムライはすべて役人であり、順番に役職をまわしたので、理論的には彼らすべて政府の事務について教育されていた。この場合才能がおのずから現われ、他方名譽をいらないと思ふ弱い人がいつもあった。それで責任ある地位はもっとも能力あ

る人の手にあった。

会計局「カイケイと書いて消してある。」はサムライの禄米、庶民から集めた租税の管理を行ない、米倉をあずかっていた。藩の会計局の建物は、アメリカで見られるような鉄の金庫あるいは石造の建物あるいは貨幣や貴金属で満ちている地下室がある建造物の類ではなかった。江戸の大会計局も、すべての藩の会計局も、米の袋「米俵」が貯蔵してあった。この媒介物「米」によって、すべての税が払われ、すべての俸給が支弁された。価値の標準は米であった。

市外には百あまりの、それぞれ孤立した耐火倉庫「土蔵」があつて、通常るときは、収穫後各倉庫は米の藁袋でいっぱいになつていた。藁の袋は各々四分の一ブッシェルはいいり、二袋で一コクになる。ひとりの俸給は、従僕、単なるサムライ、ダイミヨウ、またはシヨウグンであれ、米の袋あるいはコクで計算された。越前公はふつう三十二万五千コクのダイミヨウといわれていた。しかしこの額は藩によって領有されている土地の公式の評価額であつて、藩はこの額の半分より多くを得ることはない。残りは農民と農夫のところへいった。

杉原 大名政府

裁判所はハン内のすべての刑事事件を担当している。法律家、弁護士、陪審員が存

在しない国では、裁判は簡單で、即決で、安上りである。主な役人は判事、書記、看守、死刑執行人であつた。ハンチョウの中
の法廷の隣に拷問室があつた。死刑場「仕置場」は市の西部の小さな野原にあり、仏陀の石像「地蔵」を前にしていた。死ぬ前
の人は死の瞬間にその仏像に祈るのを常として。この部局「チョウシヨウとあるのを消して部局と直してある。チョウシヨウは聴訟。」はまたコウサツ「高札」すなわち政府の布告を監督した。この布告には、もちろんキリスト教に反対するものも含まれている。彼らはまた庶民に善行、親孝行、老齢への到達、その他に對しほうびを与えた。年老いた親または貧しい親への子としての献身や、勇氣、人間性、寛大などの著しい例は、一ドルから十ドルまでの価値の異なる金銭の贈り物によって報われる。七十才に達したすべての人に祝辞を記した公式の通達とともに十ドルの贈り物をするこゝもならわしである。二十ドルの報償が八十才の人に授けられた。これらの授賞の揭示は、通行人が読むことができるように、橋や主

要道路の近くにある市の揭示板の上に公告された。

公共監察局「カンセイと書いて消してある。」の役人は、政府の事務の検査官または監査役であり、庶民の道徳や習慣を守り、密告者から情報を受け取り、昔は、かくれているキリスト教徒または他の邪惡な教義の疑いがある人を探索した。彼らは、邪惡な宗派を信じている事実があるか否か毎年庶民を尋問することを職務としていた。彼らは地方出版物、すべての図書と冊子、劇場の演劇を監視し、歌姫の数を制限して許可証「鑑札」を与えた。彼らはすべての度量衡や見本などを検査し、しばしば商品、サービス、賃金の価格を定めた。

戸籍局「コセキと書いて消してある。」は年齢、性別、地位、身分、職業によって庶民を数え、他の国の戸籍役人がするすべての事務に精出していた。

軍務局「グンムと書いて消してある。」は、以前は矢と槍の兵器庫を管理し、武器、装具、糧食の世話をした。一八六八「明治元年」の内戦の後、彼らは役人をニコトヨルクに送り、大砲一式と数千挺のレミングト
ン・ライフル「小銃」を買った。内戦の

間、藩は數個中隊を裝備してミカドの軍隊に送った。彼らはまた軍事学校、閱兵場と兵營、火薬庫と小銃工場を維持していた。

ソウカイシヨ〔總會所〕は紙幣と貨幣鑄造を監督した。中央政府だけが金貨および銀貨を鑄造できて、各ダイミヨウは紙幣と銅銭と鉄銭を發行できた。しかし少數の者だけが後の権利〔貨幣鑄造〕を利用し、ほとんどすべては紙幣を作った。紙幣はそれが發行された領国の外では通用しないのであった。

公共事業局〔ミンセイと書いて消してある〕は、すべての公共建築物、橋、道路の建設と修理、および山、川、港などの管理に従事していた。これらのうち主要なものは、城とその付屬物、小銃工場、火薬工場と火薬庫、米倉、福井・東京・オーザカにあるダイミヨウの邸宅、ダイミヨウの墓地、堤防、港の防波堤、学校、実験室などである。この部局の役人はわたしのために化学実験室を建ててくれた。敦賀から琵琶湖に至り、そこからオーザカに達する運河を掘る彼らの獨創的な構想が、もし提案どおり遂行されていたならば、彼らはこの仕事を指揮したことであろう。彼らはまた銅と石

炭の鉱山を担当していた。

封建的政府は、この藩におけるごとく、相互關係の觀念の上に基礎を置く單純な型のものであった。家臣は、その主君に忠義であり、服従するよう義務付けられていた。庶民はなんの「権利」も、また権利のいかなる概念ももっていなかった。彼らはその政府については、その命令に従うこと以外なにも知らなかった。ただサムライだけが政治に關係していて、庶民は服従を学んだ。政府は慈悲深くかつ親切を示すよう義務付けられていた。法に対すもつとも些細な違反でもきびしい罰に処せられた。不服従は情容赦なく罰せられた。謀反は死であった。飢饉のとき政府は公共の穀倉〔社倉〕から庶民に食物を供した。繁榮した時代には、犯罪が罰され、善行が賞せられた。それは、一方の側には劔と長年月の教育と特権があり、他方の側には労働、宗教、思考からの絶縁と服従がある社会の單純な国家であった。日本におけるわたしの経験のすべてにおいて、商人や、サムライ階級以外の人で、外国人と交わったことのない人との会合で「権利」ということばが意味することのいかなる概念もたない人

に、わたしはいつも出あつた。「以下は後からの加筆」しかし今は、新聞や世論が十分に証するように、このような人はたくさんいる。

訳註

(註一) 現在郷土歴史館に保存されている契約書をみると、「福井地方庁永田大属」がグリフィスと契約している。三人の大参事ではない。

(註二) 明治二年の版籍奉還後、藩の行政組織の名称は二度改まっている。ここにあるのは二度目のもので、藩庁は掌政堂、公務局、民政寮、會計寮、軍務寮、学校、監正寮の七部局に分かれていた。グリフィスが独立の部局としてあげている裁判所と戸籍局は、民政寮内の聴訟と戸籍の係りであり、總會所は、今の商工会議所のようなもので、藩庁の直接の部局ではなかったようである。

(註三) 明治三年当時福井藩は、士族八八七軒四八一九人、卒一四三九軒七三二六人であった。藩庁の職員は九七九人である。